

いじめっ子に再会したら、

いきなり求婚されました③

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

「大丈夫だよ、あさひ……ゆっくり、触ってごらん」

私はスマホから聞こえる湊の声に耳を澄ませていた。

低い声が胸の奥に沁み込み、指先は小さなクリトリスへと導かれていく。

瞬間、全身に電流が駆け抜け、熱い蜜がとろりと零れ落ちた。

「ん……っ、あ……っ」

吐息が漏れ、腰が小刻みに震える。

くちゅ、といやらしい水音が室内に広がり、自分の耳が赤く染まっていく。

——本当は、湊に中国なんて行ってほしくなかった。

結婚してまだ一年ちよつと。

毎晩抱かれ、奥まで突き上げられるのが当たり前前の毎日。

それが突然、遠くへ引き裂かれてしまった。

海外転勤の話聞かされたあの日、私は子どものように泣きじゃくって「行かないで」とすがった。

湊も「あさひと離れたくない」と言ってくれた。

でも彼は会社から託された重い責任を背負う男であり、同時に男としての出世欲も胸の奥にあったのだと思う。

結局は中国行きを決断したのだった。

「大丈夫だよ、またすぐ帰って来るから」

空港で見た湊の笑顔を思い出すたび、胸がぎゅっと締めつけられる。

泣きながら、その背中を押すしかなかった私。

今、小さな画面の中で彼は笑っている。

でも、その笑顔は隣で抱きしめてくれる温もりには到底及ばない。

「……………湊お……………」

寂しさと渴望に突き動かされ、私は足を大きく開き、羞恥を押し殺してカメラに秘部を晒した。

照明に照らされた花びらはじゅくじゅくに濡れ、ぱっくりと開いて愛液が糸を引きながら滴っている。

「……………あさひ。俺がないのに、こんなに濡れて……………」

画面越しの湊の声に、胸がぎゅゅと掴まれる。

湊が見てる。

そう思うだけで胸の奥がきゅうつと苦しくなり、そこから蜜が溢れて止まらない。

「あさひ……………いやらしいおマンコ、丸見えだよ。今すぐ、むしゃぶりつきたい」

その低く熱を帯びた声に全身が一気に火照り、指先はさらに速くなる。

「はあっ……あ、ああっ……湊お……もう……イツちゃう……っ！」
腰が勝手に浮き上がり、太腿が細かく震えた。

クリトリスをこすり上げるたび、絶頂の波が押し寄せ、私は小さな悲鳴を上げる。
「あさひ……もっと見せて。カメラに近づけて……あさひのいやらしいおマンコ、
もっと俺に見せて」

「やあ……っ、恥ずかしい……のに……あああっ……！」

私は必死にスマホを持ち上げ、無様な姿を全部さらけ出した。

「ああっ……湊……っ、見てっ！ 私、また……イツてるの……っ！」

羞恥と快感がぐちゃぐちゃに絡み合い、蜜が太腿を濡らしていく。

「会いたい……ほんとは、抱いて欲しいのに……」

自分がどれほど意地らしい女になり果てているかを思い知らされる。

「……あさひ」

画面の向こうから、優しく包み込む声が降りてくる。

「帰ったら何度でも突いてやるから。だから……それまで我慢してな」

「……ひあつ……っ、でも……欲しいの……湊のが、今、欲しいの……っ」

涙で濡れた声で懇願する私を湊はただ優しく、切なげに見つめていた。

その眼差しに胸が締めつけられ、視界がにじむ。

「……湊……おちんちん、見せて……？　いくところ……見たいの……」

自分でも信じられない言葉が、唇から零れ落ちる。

普段なら絶対に言えない願い。

けれど、どうしようもなく欲しかった。

驚いたように目を見開いた湊は、一瞬黙ったあと、ふっと微笑む。

「かわいいな……いいよ、お前の顔に向かって、今からいくから見ろ」

カメラの角度が変わり、画面いっぱいに逞しい肉棒が映し出される。

硬く反り返り、先端から透明な露が垂れ、糸を引いた。

脈打ったびにカメラが揺れ、熱気まで伝わってくるようだ。

「ほら、あさひの大好きなチンコだ。……ちゃんと見ろ。お前のこと考えて、こんなにガチガチになってる」

喉が鳴り、私は無意識に指を速めた。

擦るたび、ぐちゅ、じゅぷつと淫らな水音が響き、腰が勝手に跳ねる。

「……あさひのいやらしいおマンコが丸見えだ。……舐めたくて仕方ない」

「やあっ……っ、湊お……そんなこと……っ……あっ……！」

羞恥で全身が熱くなり、涙がにじむ。

それでも指先は止まらず、蜜がとめどなくあふれていった。

「あ、あっ……ん、湊……だめ、もうイツちやう……っ！」

「いいよ……俺も一緒にいくから。……お前のエロい声と顔で、今イかせてくれ」

スマホ越しに響く荒い息遣いが耳奥を痺れさせ、絶頂が一気に押し寄せる。

私の絶叫と同時に、画面の中で白濁がどくどくと迸った。

カメラのレンズにまで精液が飛び散り、淫らな光景が広がる。

「……見えた？ 俺がお前のために出したの、ちゃんとわかった？」

「うん……っ、見た……っ……嬉しい……」

涙を浮かべながら答えると、湊は荒い息をつきながらも優しく微笑んだ。

「帰国したら、何度でも突いてやる。……だから、それまでは毎日こうして、俺だけを感じてろ」

その甘い声に胸の奥まで包まれ、私はスマホに縋りつく。

けれど、心と体の渴きはまだ埋まらない。

「……舐めたいよお……湊のおちんちん……舐めたい……」

画面の湊は大きく息を吐き、苦しげに笑った。

「……あさひ、そんなこと言われたら……俺、ほんと我慢できないよ。……会いたくて、抱き潰したくて……でも今はこうして耐えるしかないのに」
その声に、胸が再び締めつけられる。

「……ごめんね……でも、私もうガマンできないの……」

私は必死で指を動かし、ベッドの上にいやらしい水音を響かせる。

さつきイツたばかりなのに愛液で濡れた指が滑るたび、背筋が震えた。

「……あさひ、そんなに俺が欲しいのか……かわいい女だな。……そのまま続けろ。舐めたいって思いながら、もっと気持ちよくなれ」

「はあっ……んっ、んんっ……もう……いくっ……いくう……っ！」

腰が浮き、全身が痙攣して絶頂の波に呑み込まれた。

「湊あ……ほしい……さみしい、さみしいよお……」

涙で訴えると、湊は優しい瞳で私を見つめ、低く囁く。

「……わかってるよ。あさひがどれだけ俺を求めてるか、ぜんぶ伝わってる。安心しろ。帰ったら、思いきり舐めさせてやるし、奥まで何度でも突き上げてやる」
その言葉だけで胸がじんじん熱くなり、蜜がさらに溢れた。

「……俺だって、今すぐお前を抱きたい。乳首を吸ってクリをいじって、そのまま奥まで何度も突きたい」

「湊……そんなこと言わないで……っ……余計に……欲しくなる……」
私は片方の乳首を摘み、もう片方の手でクリトリスを擦り上げる。
頭の中はすでに、湊の唇と指、そして熱い肉棒で満たされていた。

「……あさひ……愛してる……大好きだ……」

「私も……っ、愛してる……湊……っ、あああっ……！」

絶頂が一気に押し寄せ、背を大きく反らせて叫ぶ。

遠く離れているはずなのに、ふたりは同じ熱に包まれていた。

第二話

「毎日、顔を見せ合おうね」

そう約束して、最初の頃は夜になるたびに必ずビデオ通話を繋いでいた。

一日の出来事を話して、くだらないことで笑い合って、最後は「おやすみ」と言い合って眠る。

離れていても、まるで一緒にいるような時間が確かにそこにあつた。

けれど数週間が経つころから、湊は会話の途中でそのまま眠ってしまうことが増えていった。

「起きて、ねえ……起きて」

最初は必死に呼びかけたけれど、返ってくるのは規則正しい寝息だけ。

——本当に、疲れてるんだ。

その事実気づいた瞬間、胸が締めつけられた。

私たちの未来のために、慣れない土地で必死に働いてくれている。

エッチが大好きで、毎晩のように私を求めてくれたあの湊が、声すら途切れるほど消耗している――。

「私も、わがまま言わないで頑張らなきゃ……」

そう心の中で繰り返しながらも、どうしても寂しさは募ってしまう。

スマホの画面を見つめる。

そこに映っているのは、眠りに落ちてしまった湊の顔。

安らかな寝息が、静かな部屋に響いている。

――声が欲しい。

――熱が欲しい。

――湊の手も、唇も。

気づけば私は太腿をすり合わせ、熱を帯びた秘部に意識を向けていた。シーツの上から手を滑らせ、そっとショーツの中に忍ばせる。

「ん……っ」

濡れた花びらに触れた瞬間、指先にとろりとした愛液が絡みつく。

蜜は糸を引き、私を奥へ奥へと誘い込む。

スマホの向こうからは、規則正しい寝息。

そのリズムに合わせるように、私はクリトリスを擦り立ててしまう。

じゅぶっ、ぐちゅっ……ぬちゅっ……じゅるっ……。

淫らな水音が静かな寝室にいやでも響く。

「……湊……」

名前を呼んだだけで、胸が熱くなり、背筋がぞくりと震える。

——抱いてほしい。

——今すぐ、この空っぽを埋めてほしい。

でも、画面の中の彼は眠ったまま。

「んっ……ああっ……やあ……っ、はあっ……！」

腰が勝手に浮き、涙がにじむほど激しく指を動かしてしまう。

身体は快感に痙攣するのに、そのたびに胸の奥では虚しさが重なっていく。

「……溱……っ」

愛しい人を想いながら、私はひとりで果てた。

嗚咽まじりに絶頂へ吞まれながら、ただスマホに縋るしかなかった。

第三話

デスクの上でスマホが小さく震えた。

「あら、それ旦那さんから？」

隣の席の年配女性社員が、私より先に画面をのぞき込む。

「わあ……すごい、いかにも中国って感じねえ」

スマホには湊からの「」が表示されていた。

——昨日はごめん。また寝落ちしてた。これ食べて午後も気合い入れて頑張るよ。

添えられていたのは、真っ赤に染まった麻婆豆腐の写真。

油の照りが艶やかで、立ちのぼる湯気まで見える気がする。

「ほら、あさひちゃんにもちゃんと食べなさいって言ってるんじゃない？」

「……はい、そうかもですね」

思わず笑みがこぼれ、胸の奥がじんわりと温かくなる。

——よし。私も午後、しっかり食べて頑張ろう。

そう心に言い聞かせた、そのとき。

「失礼します。本日からこちらを担当させていただくことになりました、藤崎と申します」

顔を上げると、まだあどけなさの残る整った顔立ちの青年が立っていた。

爽やかな笑みは思わずこちらまで背筋を正したくなるほど真っ直ぐだった。

「あ、こちらこそ、よろしくお願ひします」

立ち上がって名刺を受け取る。

視線がふとスマホに落ちたのか、藤崎くんが小さく目を見張る。

「わあ……すっごい真っ赤ですね。本場のやつみたいだ。……あつ、すみません、勝手に見ちゃって」

「正解！ それ本場の麻婆豆腐よ」

年配社員が楽しげに口を挟む。

「君が噂の新入社員のイケメン君か！ まあ爽やかだこと。あさひちゃんの周りにはほんとイケメンばかり集まってくるのねえ」

その言葉に、藤崎くんの目が少し大きく見開かれた。

「え……あさひって、もしかして神谷先輩の奥さまですか？」

「あ、はい……そうです」

答えた瞬間、彼は背筋を伸ばし、深々と頭を下げた。

「いつも先輩には本当にお世話になってます。先輩、よくあさひが、あさひがってお話されてたんで……」

「そ、そうなんですか、あつ、そんな、かしこまらないでください」

——湊の後輩。どこか近しく感じられて、頬がほんのり熱を帯びる。

「先輩、やっぱり本場の味を召し上がってるんですね。……なんか僕まで麻婆豆腐が食べたくなってきました」

「ちよーどいいじゃない！」

年配社員がぼん、と手を叩き、フロア全体に声を響かせる。

「ねえ、みんな！ 駅前に新しい中華のお店ができたのよ。今日のランチ、そこに行ってみない？ 本格麻婆豆腐が評判なのよ！」

「いいですね！」「行きたいです！」

あちこちのデスクから声が上がリ、空気が一気に華やぐ。

「若い子たちがイケメン新入社員だって騒いでるし歓迎会代わりね！」

年配社員がからかうように言う。「ほんとだ！」と軽い笑いが広がり、藤崎くんは照れたように、でも素直に頭を下げ「お願いします」と笑った。

午後、外回りがひと段落した頃、私たちは駅前の中華料理店に入った。

奥のテーブルに腰を下ろすと、すぐに話題は藤崎くんに集中した。

「藤崎くん、改めて見るとほんとイケメンねえ。ジャニーズみたいじゃない！」
年配の女性社員が感心したように言うと、周りがどっと笑いに包まれる。

「ほんとそう！ 朝から若い子たちが大騒ぎしてたのよ」

「廊下でも、誰？ あの爽やかな人！ って、ねえ？」

次々と飛んでくる言葉に、場の空気はますますにぎやかになっていった。

「い、いやいや……やめてくださいよ。僕なんか全然ですって」

藤崎くんは両手を振り、耳まで真っ赤にして必死に否定する。

「ほら、見て！ 耳まで真っ赤になってる！」

「カワイイ〜！」

「やだやだ、僕なんかって言う爽やかイケメンが一番タチ悪いのよねえ」

女性社員たちのからかいに、彼はますます困った顔をして首を振った。

「いやいや、神谷先輩のほうがずっと格好よくて、モテてましたから！」
私は頬が熱くなるのを感じ、曖昧に笑って受け流すしかなかった。

そんな中、藤崎くんがふっと私を見て言った。

「……神谷先輩の奥さんが綺麗だって噂、聞いてましたけど……正直、予想以上でびっくりしました」

すぐに女性社員が茶化すように声を上げた。

「はいはい、でもこの子はもう結婚してるからね！ その神谷さんと！」
みんなが一斉に笑い、場は再び明るく和やかな空気に包まれた。

熱々の麻婆豆腐の香りが立ちのぼり賑やかな会話と笑い声が混じり合う。

——ほんのひととき、穏やかな昼の時間が流れていった。

第四話

画面の中の湊は目の下に薄い影を落とし、すでに眠たげに瞬きを繰り返している。

「ねえ、今日ね、湊の後任の担当者がうちの会社に挨拶に来たんだよ。ちゃんと私にも名刺をくれて……」

反応をうかがうように話を続ける。

「それでね、湊が送ってくれた麻婆豆腐の写真、覚えてる？　一緒にその話をして……お昼、みんなと一緒に食べに行ったんだ」

小さな画面の向こうで、湊は「そうか……」と微笑むように呟いた。

けれどその声はすぐに途切れ、気づけば穏やかな寝息がスマホ越しに響いていた。

——また、寝ちゃったんだ。

寂しさと切なさが胸いっぱい広がる。

けれど、無理に起こすことはできない。

「おやすみ……」と小さく呟いて画面を閉じ、私は横たわった。ただ眠れず、結局その夜は悶々としたまま朝を迎えてしまった。

翌日。

私はぼんやりとした頭で納品物の検品を終えて、資料室へ向かっていた。地下の資料室はほとんど人が出入りせず、ひんやりと静まり返っている。

「昨日は結局、ほとんど眠れなかったな……」
独り言のように呟きながら、棚を探す。

——私、何の資料を取りに来たんだっけ。

集中できない理由は、自分でもわかっていた。

——欲求不満。

昨夜だって、本当は湊とエッチなことをしたかった。

けれど起こすのもかわいそうで結局何もできなかった。

触れ合えないまま募った熱は、こうして仕事中の私の身体にまでまとわりついて、離れない。

「…………だめなのに」

そう呟きながらも、地下の静けさに甘えてしまう。

私は壁際に寄りかかり、タイトスカートの裾をゆっくりとたくし上げた。

布が腿に沿って少しずつ上がり、やがて白い太腿が露わになる。

ストッキング越しに熱を持つ肌を撫でると、すでにじんわりと愛液が滲んでいるのがわかり、喉がひゅつと鳴った。

ためらいながらも、指先はストッキングの中、さらにショーツの下へと滑り込む。

「ん…………っ」

指先にぬるりとした熱が絡みついた。

わずかに擦っただけで、ぐちゅ、と卑猥な音が狭い資料室に響く。

——欲しくてたまらない。

私は唇を噛みしめながら、立ったまま自分を慰め始めた。

指でクリトリスを転がすたびに腰が小さく震え、熱はストッキングのつま先まで、広がっていく。

「はあ……っ、んん……だめ……なのに……」

罪悪感と背徳感が胸を締めつける。

誰も来ない地下という密閉された空間が、羞恥を逆に煽り立てる。

私は背を壁に押しつけ必死に息を殺しながら、クリトリスを擦り続けた。

潤んだ指がぐちゅぐちゅといやらしい音を立て、スーツ姿のまま濡れていく自分が惨めで……それでもどうしようもなく気持ちよかった。

あの日以来、会社で同じことを繰り返すようになっていた。

仕事中に気持ちが募ると誰も来ない地下の資料室へ足を運び立ったままスカートをたくし上げて指を忍ばせる。

——ここで少しだけ紛らわせれば、また仕事に集中できる。

そんなふうには、身体が覚えてしまった。

もちろん良くないことだとわかっている。

勤務中に、会社で、こんなこと……。

けれど背徳感がかえって快感を煽り、やめられなくなっていた。

「私……本当に最低だ……」

罪悪感に唇を噛みながらも、寂しさに支配された心と身体は言うことを聞かない。

——湊がそばにいれば、こんなことしなくて済むのに。

でも彼のせいじゃない。

けれど、私はどうしたらいいかわからない。

今日もまた、スカートの中に指を滑り込ませ、

淫らな音を立てながら、ひとりきりの快樂に溺れていた。

その時――。

物陰から小さな音がした。

「え……だ、誰？」

心臓が跳ね上がり、慌てて身をすくめる。

「……すみません」

姿を現したのは、藤崎くんだった。

「きゃっ……！」

喉から悲鳴が漏れた次の瞬間、彼は駆け寄り、私を強く抱きしめた。

耳元に、熱い吐息を混ぜた声落ちてくる。

「神谷さん……いつも、この時間になるとこの部屋に来てますよね」

「え……な、何を言ってる……」

「僕、この間、気づいちゃったんです。ずっと……こっさり見えました」
「っ……!!」

頬が一気に熱を帯び、全身から血の気が引く。

羞恥と恐怖。

そして言いようのない疼きが同時に押し寄せてくる。

藤崎くんの瞳は、焼けるような熱を宿していた。

「最初は……見るだけだいいと思ってました。でも、もう耐えられない」
低い声が胸の奥を震わせる。

「……いいですよね」

その言葉と同時に、抱き寄せる腕の力がいつそう強まった。

背中に押しつけられる若い硬さ。

鼻腔をくすぐる汗とスーツの匂い。

心臓は激しく脈打ち、全身が震え始める。

抗わなければならぬのに身体は熱に支配され、抜け出す力を失っていく。

——見られていた。

——私の、あんなみつともない姿を。

羞恥と背徳の波に呑み込まれ、足元が崩れ落ちていくようだった。

「だ、だめ……っ、藤崎くん……こんなの……っ」

必死に首を振る。

けれど背中から回された腕は強く、ブラウス越しに胸を揉み潰されるたび、身体はびくりと跳ねてしまう。

「だめじゃないですよ……ずっとここで、自分を慰めてたじゃないですか」
耳元に落ちる低い囁き。

吐息が鼓膜を震わせるたび、心臓が破裂しそうになる。

「ちが……っ、やめ……ああっ……」

拒む声とは裏腹に、久しぶりに触れられる男の手に全身が熱を帯びていく。

ブラウスの隙間から忍び込んだ指が乳首をきゅっと摘み上げた瞬間、背筋が弓なりに反り、抑えきれない喘ぎが零れた。

「ふ、あ……っ、だめえ……」

豊かな胸を驚掴みにされ、乳首をねっとり転がされる。

下腹の奥がじゅわりと疼き、脚の間に熱が集まる。

ストッキング越しに撫でられるたび、そこはぐっしより濡れていきショーツの奥は蜜で溺れ始めていた。

「……寂しいんですね？ 先輩が中国に行っちゃって……」

耳朶をくすぐる藤崎くんの吐息に、頭がくらくらする。

「僕、ずっと不思議だったんです。先輩がなんで中国行きを渋ってたのか。だって出世コースなのに……でも今ならわかります。こんなエロい奥さんがいたら……、誰だって離れたくないですよね」

「ああっ……や、やめて……やめて……っ」

羞恥で涙がにじむのに、囁かれる声に頭が蕩けていく。

「僕、自分でもわかってるんですよ。こんなこと絶対ダメだって……。でも……先輩の名前を呼びながらオナニーしてる奥さんなんて……エロすぎて、僕もう我慢できなかつたんです」

「だ、だめ……っ……藤崎くん……あっ……」

熱い指が乳首を捻り上げ、腰が勝手に跳ねる。

「神谷先輩って、どんなセックスするんですか？ やっぱり上手いんだろな……
ねえ気持ちよかったんでしよう？ だって今、俺の指だけでこんなに締め付けて」

「いやあ……っ、言わないで……っ、あああ……っ」

「ほら……指にマンコが絡みついている、相当仕上がってる身体だ、これ」
スカートを乱暴に捲られ、ショーツを下ろされる。

「……だめっ……！やめて！」

「もう……我慢できない。入れますね」

耳元に甘く低い囁き。

濡れ切った割れ目をずちゆりと割り裂かれ、奥まで一気に突き込まれる。

「んっ……あああ……っ……！」

背後からの衝撃に喉から甘い悲鳴が迸る。

——だめ、だめなのに……っ！

頭では必死に拒んでいるのに、膣奥はぎゅうっと締めつけてしまう。

「く……っ、やば……っ！ 奥で啞えて、抜けなくなってる……っ！」

ずちゅっ、ぱんっ、と湿った肉の衝突音が、静かな資料室に響き渡る。

「っ……あぁっ、あぁぁっ……！」

背後からの激しい突き上げに、腰が勝手にガクガクと震える。

資料棚の縁を掴み、崩れ落ちそうになる体はどうにか支えるのがやっとだった。

声を殺そうとしても喉の奥からみっともない嬌声が漏れ出してしまふ。

地下の静まり返った資料室に私の喘ぎと卑猥な水音がいやらしく反響する。

「はぁっ……すごい……っ！ やっぱ先輩の仕込みがいいんですね」

藤崎くんの熱い吐息が耳にかかる。

「……さすが先輩だ。仕事もできるし……奥さんまで、こんなにエッチに仕立て上

げるなんて……っ！ 悔しいなあ、悔しいなあ……っ！」

言葉に合わせて、突き上げはさらに乱暴になる。

「んっ……ああああっ！」

頭を壁に打ちつけそうになりながら、羞恥と絶望に涙があふれた。

「僕、ずっと先輩のこと尊敬してたんですよ。背も高く、顔もよくて、高学歴でなんでもできて……。でも——ずっとムカついてた」

コンクリートの床に靴音を響かせながら、腰の律動が荒れ狂う。

「その上、こんな可愛い奥さんと毎日エッチしてたなんて……。僕、ほんとムカつきます！」

怒りをぶつけるような突き上げに私の体は棚に押しつけられ、大きく跳ね上がる。

「でも……ははっ！ 今！ 僕が！ 奥さんをこうして資料室で犯してるっ！」

藤崎くんは私の腰を乱暴に掴み、容赦なく奥へと突き立ててくる。

「先輩が羨ましくて仕方なかった僕が、今は、その先輩の大事なかわいい奥さんを